書評

岡本裕一朗著
『異議あり！生命・環境倫理学』（ナカニシヤ出版、2003年）

本書は、好戦的なタイトルとは裏腹に、ある意味でなかなかよくできた生命倫理学と環境倫理学（著者にならって生命・環境倫理学という言い方を利用する）への入門書である。

まず、序章で著者自身の言うところの本書全体の問題設定を確認しておこう。本書冒頭で著者は、生命・環境倫理学を含む応用倫理学全般について、新しい論点がない、現実に対応できていない、現実に対応するときには単なる常識論になる、というような診断を下す（わたしも「応用倫理学」というカテゴリーで日本で出版される本や論文の多くにこの診断があてはまるという点では著者と同意見である）。これらの理由から応用倫理学は「終わっているのではないか」と著者は言い、それが本当かどうか判断するための「材料を提供する」のが本書の目的だと言う(15ページ)。わたしの読み間違いでなければ、これが本書の目的のはずである。しかし、以下の各章で実際に著者がやっている作業は、生命・環境倫理学の主要なテーマについて論争を呼んだ古典的な議論を紹介し、自分自身の見解（しかもかなりの極論）を提示する、というものである。言い換えれば、本書の本体での議論は、生命・環境倫理学に非常に内在的な議論に終始しているのである。これは、もしも著者が額面通りの目的を持っているのであれば、控えめに言っても目的と手段があまりにも食い違っている。最近の研究については他の本に譲る(16ページ）と著者は言うが、生命・環境倫理学が現状で「終わっている」かどうか判断するために見るべき情報はまさに議論の現状、すなわち最近の論点であるはずである。クローンや人間中心主義については額面上の目的に添った論点もあるが、著者が批判する傾向に反対する論者が生命・環境倫理学の中にいることは、なによりも著者自身が引用する文献によって明らかである。

そうなると、著者の意図は別のところにあるのではないかと疑いたくなってくる。そして実際、こうした古典的な議論や極端な議論を提示することは、読者に思わず反論したい気をおこさせ、いわば読者を論争のまっただ中に導くことになる。とすれば、著者の真の意図はそこにあると考え

るのが妥当だろう。すなわち、目をひくタイトルで読者を引きつけ、とりあえず読ませて、生命・環境倫理学の中心まで導く。あとは巻末の文献ガイドを頼りに新しい論点を自分で学んでいってください、というわけである（この文献ガイドも文献の選択になかなか配慮が行き届いている）。著者の議論がかなり荒っぽいのも、反論を誘発しやすくして読者を巻き込む戦略だと考えれば納得がいく。

ただ、本書の意図をこのように読み替えるとしても、著者の表面上の問題設定には妙なところがあるので苦言を呈しておこう。「生命倫理学」が常識論ばかり言う、とか「環境倫理学」は批判にどう答えるのか、といった表現が本書では繰り返されるが、これは（著者の愛用する言い方を使えば）「カテゴリーミステイク」であり、ある問題について論じる分野と、その分野における主流の立場を混同している（分かりやすい例で言うと、ある公園で遊んでいる人の大半が野球をやっているからといって「公園が野球をやっている」という表現がおかしいのと同じである）。言い方として変だというだけでなく、この言い方をしてしまうと、これらの分野における反主流派（たとえば生命倫理学における功利主義者や環境倫理学における人間中心主義者）は生命・環境倫理学者ではないということになりかねない。これらの分野を日本に紹介した加藤尚武自身がこういう言い方をしているので一概に著者を責めることはできないが、そんなところで先達を真似する必要はないのであって、カテゴリーミステイクに基づく問題設定はやはり避けるべきだろう。

わたしの理解が正しければわざと反論を誘発するような箇所を多くしてある本書に対し細かな批判を行うのは野暮というものであるが、入門書としての性格を考えるとちょっとまずいと思われる部分もあるので、以下、各章ごとに指摘していこう。

第一章では、著者は、トムソンとトゥーリーの議論の紹介を軸にして中絶の是非について論じている。紹介そのものは丁寧で、両者について批判すべきポイントもきちんと押さえられているので、中絶をめぐる論争の出発点の紹介としてはなかなかよい出来になっている。ただ、論争全体の見取り図ということでいえば、紹介する立場が偏りすぎているきらいがある。受精卵の段階ですでに道徳的地位を持つという立場がどこまでがんばれるかという検討や、妊娠３ヶ月あたりに線を引く立場が単なる常識論か根拠があるかという検討も（額面上の目的から言っても）ほしいところである。

細かい点でもいくつか不満がある。まず、著者は。種差別という非難をさけるためにトゥーリーがあのような議論をしたのは「明白」だと言っている(40 ページ) が、著者自身の記述を比較しても分かるとおり、種差別という概念がシンガーによって広められるのはこの論文の出た後であり、この分析は一種のアナク ロニズムである。さらに、受精卵と成人の間のどこかで線を引かなくてはならないという線引き問題が動機付けとしてあるということを著者自身指摘しているのだから、それ以上の動機を求める必要はないだろう。また、トゥーリーの議論が「定義の繰り返しに終始している」(50ページ) という診断はトゥーリーに対して厳しすぎる読み方だろう。トゥーリーの議論の背景にあるのは「欲求は尊重しなくてはならない」という原理であり、これは定義ではなく実質的な規範的主張である。著者が定義の連鎖とみなすものは、実際にはこの原理を出発点とした論証の過程である。そこのところはきちんと押さえてあげなくては、トゥーリーに対しても読者に対しても不親切であろう。

第二章では臓器移植の問題を扱っている。臓器売買の問題はまだ日本ではほとんど論じられておらず、この論点を紹介した点で本書は評価できる。しかし、本章を通じて非常に気になるのは、臓器移植そのものの倫理性の問題と、臓器移植の実効性の問題をきちんと区別せずに論じている点である。その結果、現状維持派 は実質上の反対派である(81ページ) といった主張がなされる。しかしこれは概念的には混乱した議論であるし、実際的にも誤っていると言わざるをえない。仮に現状維持派の立場では移植がまったくできないとしても、現実の状況に当てはめた結果が同じなら実質的に同じ立場だ、というのでは、著者が本気で倫理学をやる気があるのかどうか疑問に思わざるをえない。哲学的議論においてはどうしてその結論にいたったかという理由が大事である。また、事情が少し変われば結論も変わる可能性がある、という意味で、理由の差は実質的な差でもある。さらには、現在のシステムでも脳死からの臓器移植によって救われている人が日本ですでに数十人にのぼり、アメリカでは年間数万人のオーダーの人が 臓器移植を受けている。現状維持派は実質上の反対派だと著者が考えるということは、これら移植で命を長らえた人がいるという事実は誤差の範囲内とでもいうことだろうか。実のところ、日本における臓 器移植の現状について著者が調べた様子はあまりない。たとえば「脳死者の臓器を移植して一人の命を救う」(53ページ) という記述は、現実の脳死移植の大半で複数の臓器が利用されているということを知らないで書いているようにし

か読めない。この箇所でもう一つ疑問なのは池田清彦への評価(76ページ)である。著者は池田の議論を「ロジカル」だといいながら、いっこうにその「ロジカル」な議論を紹介する気配がない。紹介するのは、レシピエントやそのまわりの人々が「浅ましい」という非常に感覚的な主張だけである。それに続く非対称性の議論は一見池田の議論の紹介のつづきのように見えて、著者自身の主張であるということは著者自身が注の中で断っている。

第三章では安楽死の問題とクローンの問題が取り上げられ、自己決定の重要性が強調されている。安楽死については著者は本人の同意があるかぎり積極的安楽死をすることには問題がないという立場をとっている。古典的議論を紹介しているので仕方ない面もあるが、やはり問題設定が若干古い感じがする。現在では苦痛緩和技術の発達により「除去できない苦痛」という条件はほとんど満たされず、議論の焦点は尊厳死や間接的安楽死に移っているというのが私の理解であるが、著者の議論はその前の段階で止まっている。

また、滑りやすい坂道論に対する反論はあまりに粗雑である。「非自発的安楽死」と「反自発的安楽死」の間ではすべらない（105ページ）と著者は考えているようだが、その根拠はほとんど示されていない。滑りやすい坂道論を相手にする際には、それが心理的滑りやすさを問題にしているのか、規範的な滑りやすさを問題にしているのか、前者ならば途中に十分な心理的距離があるかどうか、後者ならば途中に規範的に重要な落差があるかどうかを論じる必要がある。そういう基本的な部分はもっときちんと紹介してほしいものである。

クローンについての著者の議論も批判するべきところは多い。クローン人間を作ることで一番大きな影響を受けるのは、言うまでもなくクローンとして産まれてくる子供である。それを自己決定だけの問題に収束させるのはまずいだろう。また、著者の「自然主義的誤り」の説明(129ページ)はムーアの議論の紹介としては非常にまずい。この書き方では、ここでいう自然主義とは「自然なのはよいことだ」という立場だと読者が誤解するように仕向けているとしか思われない。「自然主義的誤り」という表現を紹介するなら、めんどうでもムーアがどういう意味で「自然主義」という言葉を使ったかきちんと説明すべきであろう。ついでにいえば、「自然主義的誤り」と「事実から価値は出てこない」というのも厳密には独立のテーゼであるが、本書はメタ倫理学の教科書ではないのでそこまでの厳密

さを要求する必要はないかもしれない。そのほか、134ページの男性中心主義に関する奇妙な議論や137ページで自分で滑りやすい坂道論を使っているところなど、この近辺では著者は批判を誘発するような議論を多く用意してくれている。

第四章では人間中心主義を批判するさまざまな立場を論じている。まず取り上げられるのはシンガーの立場である。著者がシンガーの功利主義に同意しないのは自由だが、シンガーが何の根拠もなく動物を三分類しているかのような記述（152-154ページ）は困りものである。シンガーが「平等な配慮の原理」（実質的には功利主義）という道徳原理を適用してこうした区別にたどり着いたという議論の醍醐味を紹介してほしいところである。また、それと関連して、シンガーの議論が自己論駁的だという著者の診断はおかしい。シンガーが反対しているのは区別した扱い一般ではなく、根拠のない差別扱いである。シンガーの立てる区別が平等な配慮の原理という根拠を持つのに対し、人間中心主義はそうした根拠となる道徳原理を持たない。

生命中心主義については、現代における生命中心主義の代表的論客であるテイラーの議論を紹介していないのはやはりまずいであろう。生命中心主義をどう実践に結びつけるかという問題などについてテイラーは答えを提示している（著者の引用するシュバイツァー自身もある程度の答えは用意している）わけだが、そのことにまったく言及しないで切り捨てるのはこの場合少しアンフェアである（ただし、彼らの議論の善し悪しはまた別の問題で、最終的には生命中心主義は無理のある立場だということについては著者に同意する）。

もう少し一般的な論点として、実現不可能な理想を語ることは偽善に過ぎないという趣旨のことを著者は述べている（164ページ）。この考え方を敷衍すると、政治家が完全に倫理的になることはないのだから政治倫理について語ったり汚職を防止する措置をとったりするのは偽善だということになるが、著者はそれでもいいのだろうか？

第五章では『沈黙の春』や『成長の限界』に示される破滅予測が批判的に検討されている。まず『沈黙の春』についてだが、カーソンが農薬をどう使えばよいかについて何も具体的な提案をしていないかのような記述がある(187ページ)が、それは事実誤認である。カーソンは農薬の使用がもっとも効果的になる時期を選んでピンポイントで農薬を使うことを提案している。いずれにせよ、代替手段があるかぎり農薬をできるだけ減らした方

がいいというのは十分具体的な主張であり、カーソンの主張が具体性を欠くという著者の批判は（意図的にやっているにせよ）的はずれとしか思えない。

次に『成長の限界』についてであるが、著者は本当に『成長の限界』を読んだのか疑わしい記述が多い。石油の埋蔵量などについての予測はあくまで目安として提示されているだけでありメドウズのチームが行う多様なシミュレーションの大半はそれに依存していないのだが、著者の記述を見るとあたかもそうした埋蔵量予測がこの本の中心であるかのような印象を与えてしまうだろう。また、著者はメドウズチームの 予測する破滅の時期が２０００年であるかのような書き方をしているが(193ページ)、これもシミュレーションのアウトプットを少し気をつけて見ればわかるとおり、メドウズチームの予測する破滅の時期はおおむね２０５０年あたりである。そもそも著者は『成長の限界』のどの部分に反対しているのだろうか。地球が有限だという自明の主張に反対しているのだろうか？石油はいくら使ってもなくならないとでも考えているのだろうか？人口がいくら増えても食料問題は起きないと考えているのだろうか？もしそうでないなら、結局は早いか遅いかの違いだけであって、破滅的結果を防ぐ努力が必要であることには変わりないと思うのだが、どうなのであろうか。

第六章では著者は環境保護運動の背後にある政治的な意図について論じている。著者の考えでは、７０年代における資源枯渇の問題、８０～９０年代における温暖化の問題はいずれも原子力産業が背後にあって仕掛けたものだということになる。もちろんこれは十分ありうることだが、はたして意味のある批判だろうか。まず、あまりに当たり前のことだが、ある主張を誰がどういう意図でしたかということと、その主張が妥当かどうかというのはまったく独立の問題である。さらに言えば、仮に原子力産業が資源枯渇論や温暖化論の背景にあるとしても、環境保護運動自体がそれによって規定されているとは考えにくい。７０年代における資源枯渇論は、具体的提案としては、シューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル』やロビンスの『ソフト・エネルギー・パス』と結びついていたとされる。これらは、言うまでもなく、原子力のような巨大エネルギー産業を否定する考え方である。著者はこれをどう説明するのか。また、８０年代の環境保護運動は、特にチェルノブイリ事故以降、反原発運動と密接に結びついていた。著者はこれについてどう考えるのか。

以上、つい野暮なコメントをしてしまった部分もあるが、本書を読者に

有効に利用してもらうためには、この程度の注意はやはり必要だろう。この本をきっかけに生命・環境倫理のおもしろさに目覚める読者が多いことを祈るばかりである。

（伊勢田哲治　名古屋大学情報科学研究科）